『笑い』という書物はいったい何をしているのか

杉山直樹（学習院大学）

◆はじめに

「謹んで私の二冊の主要著作、『意識の直接与件についての試論』と『物質と記憶』を送らせていただきます。またそれに、出版したばかりのそれほど重要ではない主題（un sujet moins important）についての小著、『笑い、滑稽なものの意味』を添えます」（C. p.56, à Ch. Renouvier, 1900）

「笑いというのは、クレルモンの学区総長であったブールジェ（Bourget）――あの小説家の父で、彼は息子が大学を放棄したことを決して許さなかったのだけれども――が晩の講演会を始めた時に私が自分で立てたテーマだ。しかしあとで気づいたのだが、私はこのテーマを誤った仕方で扱ってしまったので、あらためてその定義を、発生を通じて（*per generationem* 発生的に）取り上げ直さねばならなかった。かくして材料を１５年にわたって蓄積したのだが、それがラヴィス（Lavisse）が何か書いてくれと求めてきたとき、『パリ評論（*Revue de Paris*）』に論文を書くのに役立ったというわけだ。その論文から、『笑い』についての小さい本を出版したのだ」（Chevalier, *Entretiens avec Bergson*, p.239(le 26/2/1936)）[1]

『笑い』という書物の成立には外的事情が大きく関与しています。また、ベルクソン自身、それを必ずしも自らの重要な著作だとは見なしていません。しかしまさにそれゆえに、それだけに、ある時点でのベルクソンの基本的思考を、いわばその断面において、そのまま示してくれているのではないか、と見ることも可能でしょう。

ある時点、というのは、この研究会においてはほとんど説明の必要もないことですが、激しい論争ののちに自らの哲学観について、ある種メタレベルの反省をそれとして示した論文「形而上学序説」（1903 これもまた依頼されて書かれたものではありますが）が発表され、そして『創造的進化』（1907）がそろそろ準備されつつある時点、という意味です。そこに多くの講演や論文（特に「知的努力」「夢」などは重要に見えます）をさらに重ね見ても構いませんが、ともかく研究対象に関しては、個人的な水準での心理学的生のディナミスムが宇宙論的な生命とその進化へと拡張されつつある時期、そして方法論的にはあの「直観」という語が、概念と記号による思考様態としての「分析」との対比でそれとして語られ始める時期――そこで書かれたのが『笑い』という書物であったわけです。

一定の考察はこれまでにもなされていますし、最近のエディションの注でも、Sibertin-Blanc が明晰な指摘を行っています[2]。つまり、『笑い』には、ベルクソンならではの認識論、方法論、ひいては存在論が、もちろん限定された主題のもとにではあれ、相当にくっきりした形で示されているのだ、というわけです。私たちもそれに同意します。あとでまた論じますが、例えば「形而上学序説」がふと口にしている「流動的概念」、つまり単なる批判対象となる通常の概念とは異なるしなやかな概念とは具体的にはどういったものであり、それは論述においてどのような相貌で提示されるのか。あるいは『創造的進化』が生命を語るときのその語り方、絶えず分岐しなが

[1] ８４年の時点でのベルクソンの見解は、直接知ることができません。間接的報告からすれば（M314）、ベルクソンは「笑い」を、「我々の能動性の展開の突然の中断から帰結するもの」あるいは「共感の一つの効果」だ、と論じたようですが、ともかくこうしたタイプの考察をベルクソンは誤りであったと早くから感じていたようです。
なお、以下仏文引用中の太字は杉山による強調です。イタリックは原文強調。

[2] Édition *le choc*, 2007, pp.172-173 (note 1). いくつかの留保は可能ですが、優れた注だと思います。

らしかし一つのエランという一種独特の統一性を持った生命の進展をどう描くのか、そしてその中でベルクソンが到達しようと欲している最終目標が「生命の意味 signification」（v. EC ch.3 « De la signification de la vie　L'ordre de la nature et la forme de l'intelligence »）であるとしたら、それはどういう意味で「生命の意味」と言われるのか、そしてそれはどのように把握されるのか。――いくぶんランダムに列挙しましたが、こうしたさまざまの問いに、『笑い』は、明確な回答とは言わずとも、何か豊かな示唆を与えてくれているのではないか。そうした期待が抱かれてもむしろ当然でしょうし、また、テクスト上でその期待がある程度満たされると認めても構わないでしょう。

ただ、これは一般論ですし、その限りで正当である種類の指摘です。それを否定するのではなく、より詳細に検討してみよう、というのが、以下の雑駁なノート的考察の、モチーフです。

私たちは、「『笑い』という書物はいったい何をしているのか」と問います。これは、「何を取り扱うのか」という問いともちろん相即しながらも、まったく同じ問いではありません。また、「どんな結論を示してくれているのか」という問いでもありません――『笑い』の「結論（conclusion）」とは何でしょうか？奇妙なことに、この書物には「結論」がないように思われます（どうでしょうか？）。

「何をしているのか」とは、「一定のテーマに関して、どのようなアプローチを、どのような考察態度を、どのような論述形態を、ベルクソンは採用しているのか」という問いであり、同時に、そうした態度決定を規定しているベルクソンの先行了解とは何か、そもそも何が彼の論述の「いかに」を規定しているのか、という問いです。私たちのこうした問いそのものにもう少し形を与えておきます。

◆定義という作業への警戒

私たちがここで扱う書物、すなわち *Le rire. Essai sur la signification du comique* という著作に対して、「いったい何をしているのか」と問うことは、奇妙にも見えるでしょう。タイトルがそれをすでに示しています。「滑稽なものの意味」を論じること。第一章の冒頭を見ても構いません。

> Que signifie le rire ? Qu'y a-t-il au fond du risible ? Que trouverait-on de commun entre une grimace de pitre, un jeu de mots, un quiproquo de vaudeville, une scène de fine comédie ? Quelle distillation nous donnera l'essence, toujours la même, à laquelle tant de produits divers empruntent ou leur indiscrète odeur ou leur parfum délicat ?(R 1)

「笑いの意味するところ」「笑いを誘うものの根底にあるもの」、私たちを笑わせるさまざまなものごとに「共通」のもの、ないしそれらの「本質」を抽出する「蒸留」法――『笑い』はこれを論じるのだ。ベルクソンの言明に曖昧なところはありませんし、こうした考察は哲学者が、あるいは科学者が、常に従事している種類のものです。「笑い」や「笑いを誘うもの」に別の主題を適宜代入すれば、あれこれの哲学書の問題が、科学者の研究テーマが、それとして定式化されることでしょう。ですから、私たちの疑問について、悩む必要は特にないと思われて当然です。しかも、そのつもりで『笑い』を読めば、ベルクソンの基本的な回答は比較的早く提示されているように見えます。

> ...une certaine raideur du corps, de l'esprit et du caractère, que la société voudrait encore éliminer pour obtenir de ses membres la plus grande élasticité et la plus haute sociabilité possibles. **Cette raideur est le comique, et le rire en est le châtiment**.(R 16)

生の本来的な姿を失うことで生じる「こわばり」こそが「滑稽なもの」**であり**、それに対する本質的に社会的な懲罰ないし、ただしごく軽い形で与えられる矯正的懲罰が、「笑い」というあの独特の表情と所作**なのだ**、とい

うわけです。これ以上単純な話はないかに見えます。

しかしベルクソンは上のように述べたのち、すぐにこう続けています。

> Gardons-nous pourtant de demander à cette formule simple une explication immédiate de tous les effets comiques. Elle convient sans doute à des cas élémentaires, théoriques, parfaits, où le comique est pur de tout mélange. Mais nous voulons surtout en faire le *leitmotiv* qui accompagnera toutes nos explications.(*ibid*.)

以上は「単純な定式」なのであって、それはただ「あらゆる混じりもの」を含まない、基本的で理論的で完全なケースにしか当てはまらないものだ、と言うのです。以上の「定式」は、ここでいったん「ライトモチーフ」と言いかえられ、あらゆる事例、「さまざまの滑稽な効果＝結果（effets comiques）」を直接説明するような権限を剥奪されています。

「ライトモチーフ」――この音楽的概念をベルクソンがここで口にしているのはいったいなぜでしょうか。そしてこの「ライトモチーフ」があらゆる説明に「伴う」というのは、実際には、どういう事柄なのでしょうか。さらに言えば、『笑い』の冒頭で列挙された問いに出てくるさまざまの語、「意味する（signifier）」、「共通の（commun）」、「本質（essence）」といった語は、それら自身、何を指示しているのでしょうか。「意味する」とは、『笑い』のタイトルに登場する（*Essai sur la* ***signification*** *du comique*）ものですが、「意味する」仕方、それ自体が相当に多義的です。そしてベルクソンはすでに、〈こわばりこそが、滑稽なものの意味するところのものだ〉という言明に着地して安らぐことを禁じています。なぜでしょうか。どんなものであっても、滑稽なもの、可笑しいものについては「共通の」ものがあって、それは例えば「こわばり」なのだ、と言ってはいけないのでしょうか。どんな脊椎動物にも共通の一般的な本質があって、それが脊椎動物をそれとして定義するものであるように、「滑稽なもの」の « essence » とは、さまざまの可笑しいものについて必ず「共通に」見られる、それらが多かれ少なかれ含み持っているものだ、と、ごく普通の発想から理解してはいけないのでしょうか。すでに私たちは、答の見えにくい一群の問いに導かれつつあります。

◇（単なる蒐集列挙／帰納／演繹の区別をベルクソンは十分に理解しながら、いずれも特権視していない）

仮に、ごく雑駁な立場から話をしてみます。多種多様なものごとが与えられた場合、それに対する態度にはさしあたり三つのものが区別されます。第一に、単なる列挙。第二に、それらから一般的な概念へと至ろうとする経験的帰納。第三に、むしろ一般的な概念から出発してそこから多様な事実を演繹してみせる演繹的態度。

ベルクソン哲学全体を見渡す限り以上の区別がそのままでは維持されないこと、私たちはそれを喜んで認めます。典型的にはベルナール論で言われるように、帰納と演繹（総合と分析）とは事実上不可分なのであって、こちらからの仮説的問いかけを前提としない純粋な観察などはあり得ないでしょう。そしてまたベルクソンの著作自身、多くの場合、仮説演繹法的とも言えよう論述を多く含むことは認めてよい事実です（仮説が提示され、それが多面的に検証され、確立されていく、という手法）。そもそも文章や数式の意味を私がそれとして把握できるのは、あくまでこちらが能動的に形成しこちらから投げかけられる「動的図式」から出発してなのだ、という『物質と記憶』以来のテーゼ、純粋な帰納を否定するはずのテーゼも、周知のものでしょう。

しかし他方、以上のような区別は、ベルクソンがまったく放棄するものでもないのです。例えば『創造的進化』第三章は、知性の代表的な機能として、帰納と演繹とをいったん区別していました。また、あとでも触れますが、同じ「笑い」という事象を扱った心理学者サリーSully への書評で、この心理学者が可笑しい事象を列挙する際に、そこに列挙の基準はもちろんそもそも列挙の「順序（ordre）」すら支配するはずの「導きの糸（fil conducteur）」が欠けていることに不満を漏らしていたのはベルクソンです（M 597）。彼は、単なる事実ないし事実群の列挙だけでは満足できないわけです。

しかも『笑い』そのものの中で、ベルクソンが経験的観察と理論的演繹とを区別している箇所が見いだされるのです[3]。第二章で、ベルクソンは子供を笑わせるものとして三つのアイテム――びっくり箱、操り人形、雪だるま――を挙げて、これらのイマージュが大人を笑わせるものにもひそかにある仕方で残存していることを主張しようとしていました。しかしそうした作業はひとまず「ことの経験的な進め方」とされ、それとは別に、「方法的で完全な演繹」を行うことができ、それは今度は喜劇の多様な手法の「源泉そのもの」「不変で単純な原理」へのアプローチを許すだけの価値を持つもの、「実際にある、またあり得る、喜劇のあれこれの手法についての、今度は一般的で完全な、抽象的定式を手に入れる」ことを許すのだ、と言うのです（これは具体的には、対照項としての「生」の本来的なあり方（連続的変化、逆転不可能性、個体的系列の独立性）を記述し、それとの対比で「滑稽なもの」の規定（反復、逆転、干渉）を与えていく、という作業を意味しています)。経験的な帰納と、理論的な演繹とは、やはり一応区別されています[4]。

こう見ると、ベルクソンの立場は非常に曖昧に思われてきます。『笑い』という書物はいったい何をしているのか。さまざまの滑稽なことがら、可笑しい事象から、経験的な仕方で共通点を見いだそうとしているのか。そうしたものとしての「本質」を探求しているのか。そうでもないようです。またそれを反転させて、ある共通点を最初に提示して、さまざまの事象のうちにその存在を確認して見せるという演繹的作業ばかりをしているというわけでもないようです。しかも、単にあれこれの滑稽な事柄を列挙したり、グループ化して終わり、というわけでもありません。そこには一定の「順序（ordre)」があってしかるべきだとされているわけです。

実際、『笑い』には、「観察（observation)」の語もあれば「演繹（déduction, déduire)」の語もあり、「定義（définition, définir)」「法則（loi)」「定式（formule)」といった概念も何度も登場してきます。「本質（essence)」の語も見ました。その他の語群もありますが、ともかくも、『笑い』の叙述は、列挙でもなければ、帰納でもなく、演繹でもない――あるいはそれらのいずれでもある相当に複雑な混合体である――ひとまずはそう言わねばならないように

---

[3] Mais ceci même nous invite à chercher plus loin et plus haut. Nous nous sommes amusés jusqu'ici à retrouver dans les jeux de l'homme certaines combinaisons mécaniques qui divertissent l'enfant. C'était là **une manière empirique de procéder.** Le moment est venu de tenter **une déduction méthodique et complète,** d'aller puiser à leur source même, dans leur **principe permanent et simple,** les procédés multiples et variables du théâtre comique. Ce théâtre, disions-nous, combine les événements de manière à insinuer un mécanisme dans les formes extérieures de la vie. Déterminons donc les caractères essentiels par lesquels la vie, envisagée du dehors, parait trancher sur un simple mécanisme. Il nous suffira alors de passer aux caractères opposés **pour obtenir la formule abstraite, cette fois générale et complète, des procédés de comédie réels et possibles.(**R 67)

[4] これらの共存ないし混交を示すリストはあまりに長いものになるでしょうから、ごく一部分だけを列挙してみます。
・事例観察から出発するベルクソン：
「まず我々は、根本的だと思われる三つの観察（observations）を示そう」（R 2）
「しかしいくつかの事例（exemples）が必要となる」（R 7）
「読者にただ次のことをお願いしよう。さまざまな奇形を見渡して（passer en revue）みて、次にそれらを二つのグループ、つまり一方には自然が可笑しいものへと方向付けた奇形と、他方にはそれからはまったく隔てられた奇形とに分割してみて欲しいのだ。我々の考えでは、読者は次のような法則を取り出す（dégager）に至ると思う：まともな体つきをした人間が装うことのできるような奇形はすべて滑稽なものになり得る」（R 18）
・「演繹」的なベルクソン：
「形態の滑稽さから、身振り（*gestes*）と動きの滑稽さへと移ろう。直ちに、この種の事実を支配しているように思われる法則（loi）を明言しておこう。それはここまでに読まれた諸考察から容易に演繹される（se déduire）ものだ。
人間の身体の態度や所作、動きは、その身体が単なる機械を思わせるのにまったく比例して、笑いを催させるものとなる」（R 22-23. 下線部は原文イタリック）
「『精神的なものが問題である時に、その人の身体的なものへと我々の注意が逸らされるたびごとに我々は笑う』。これが、論述作業の第一部で我々が立てた法則であった。それを言語に適用しよう（appliquons-la)」（R 87）

ただし、以上の文面もよく見ると簡単に「帰納」「演繹」を意味したものではありません。「三つの観察」は、いきあたりばったりの事例収集ではなく、すでに「根本的だと思われる」ものとして提示されるのですし（実際そこから、『笑い』とは１）人間に関わる、２）観察者の無関心性を条件とする、３）集団に関わる、という三つの重要なテーゼが引き出されてきます)、「演繹されてくる」のは、「事実」ではなく、そうではなくて「法則」自身が他の法則から演繹されてくるのであって、このように、個別的事実／一般的法則のペアと帰納／演繹のペアとの通俗的な並行は、ベルクソンによってそのまま引き受けられてはいません。また、こうした多様な言明の、論述全体での位置についてはくれぐれも注意が必要です。事例観察から出発するのは、『笑い』の比較的最初の部分に多く見られること、「演繹」が語られるのはむしろその後である、といった事実は確かにあり、そしてそれは無意味なことではないからです。

見えます。

しかしこうした確認は、まだ単なる出発点に過ぎません。以上の語をベルクソンが用いているとして（ただし『笑い』において帰納（induire, induction）の語がそのままではほとんど見いだされないことは指摘しておきます）、しかしそれが、いま私たちが設定した通常の枠組みの内部で持つような意味をそれぞれ保持しているか、それは明らかではないのです。すぐ見るように、「笑い」をはじめとして一般に心理学的事象はそもそも「定義」に「閉じ込める（enfermer）」ことのできないものだ、とも彼は言うのです。実際、定義されるべき対象をただちに限定し包摂できない定義とはいったい何でしょうか。通常、そうしたものをひとは「定義」、少なくとも十分な定義とは呼びません。そして、そんなものから出発するとしたら「演繹」とはいったい普通の意味での「演繹」であり得るでしょうか。見慣れた語彙を用いながら、ベルクソンが行っているのが実は見慣れない何か異様な作業だ、と考える可能性が十分に残されていると思われるゆえんです。

ですからあらためて問いましょう。『笑い』が「本質」と言う場合、それは何のことでしょうか。「法則」とはどういう意味で「法則」なのでしょうか。そして滑稽なものの「意味（signification）」とは、滑稽なものに関してのいったい何を指し示そうとする語なのでしょうか。『笑い』という書物は、いったい何をしようとしているのでしょうか。

◆誤読と反論。ベルクソンがしていないこと

『笑い』についての誤読があり、またそれに対立する学説があり、ベルクソンはそのいくつかに対して自ら反論ないし意見表明をしています。文献的には、以下の四つをその主要なものとして挙げることができるでしょう。

１）À L. Dauriac, M 436-437(1900)

２）Compte rendu de « An Essay on Laughter » de J. Sully, M 594-603(1903)

３）À É. Faguet, M 631-637(1904)

４）À Y. Delage, R.155-157(Appendice)/C.882-884(1919)

以上を材料として、ベルクソンの立場をもう少し明確にしてみましょう。ベルクソンの批判点から、彼自身の立場を限定してみようというわけです。

【因果的諸法則への還元が問題なのではない】

１）では、こう言われています：「あなたは私の著書に、私がそこにおこうと欲した以上のことをお捜しなのではないかと思う。つまり、滑稽なものの、『こわばった（raides）』そして本当の意味で因果的な（véritablement causales）諸法則への還元を。それはまったく私の考えではない」（M 436）。そしてそもそもが、「どんな概念も、心理学的な実在を閉じ込める（enfermer）することはできない」（M 436-437）のだ、とベルクソンは述べています。単純な定義の作業の拒否です。

【原理なき列挙が問題なのではない（また社会進化論的な意味変化が重要なのではない）】

２）：先に触れたように、この書評を通じて特に強調されるベルクソンの批判点、不満は次の点にあるように思われます。まず何より、サリーはその著書の第四章で、滑稽なものの特徴を１２点にわたって列挙して見せています。新規で奇妙なもの、ノーマルさからはずれた奇形逸脱、道徳的悪徳、等々。しかしここでは、まず第一に、この列挙の原理が不明です。そして第二に、それら列挙される特徴を持ちながら、私たちを笑わせないものがいくらでも見いだされます。「可笑しいものについての彼の考えは、それが包摂し（embrasser）しようとするものに対してあまりに広すぎる（trop large）のだ」（R 602）。ベルクソンもやはり、主題は何であれ一般に哲学者が求めるのと同様に、一定の体系性を、そしてそこで示される観念（定義、特徴付け等々）の精確さを、求めています[5]。

[5] なおこの書評でもう一つ着目しておいてよい点があります。サリーは、私たちが何を笑うか、滑稽だと見なすかについて、進化論的な観点を導入していました。ベルクソンはこの考察について、比較的多くのページを割いています。子供の笑い、未開人の笑い、文明人の笑い、それぞれは性質を変えながらしつつだんだんと進展してきている、という説です。しかし、ベルクソンがそこで評価

【換言的定義をするのではない】

３）ファゲへの反論。ファゲの考察の巧みさをいったん褒め上げたあとでベルクソンは言います、「しかし、この観念［滑稽なものの源泉（source）と考えられたオートマティスムという指導観念］を、滑稽なもの全般へと適用（appliquer）する仕方に関しては、私たちの間には大きな、非常に大きな誤解があります。／あなたの論評の最初から最後まで、あなたはまるで私が、滑稽な効果のどんなものもオートマティスムの効果（effet）だ、と言っているかのように話を進めています。これほど私の考えから隔たったものはありません」（M 631）。

ここで« automatisme »と言われるものは、狭義の心理学用語というよりも、先に引用した『笑い』の断定的なフレーズで「こわばり raideur」と言われたものと一定の親近性を持った事象でしょう。それが「滑稽なものの源泉（source）」であることをベルクソンは否定していません。しかし、「滑稽な効果すべてがオートマティスムの結果（effet）だ」と自説を理解されることについて、ベルクソンはきっぱりそれを拒んでいます。もしそんな命題が正しければ、ひとは単に「自動的だ」と言うにとどまったはずで、それに加えて「滑稽だ」という言葉を作り、用いたはずはないのだ、常識はそんなに馬鹿ではない、とベルクソンは言います（M 632）。「滑稽なものとは自動的なもののことではないし、予期せぬもの、自明なもの、下品なものや俗なものでもないし、コントラストや矛盾のことでもないし、こう言うことを許していただきたいけれども、あなたがその論評の最後にとても巧みに定義されたような、無害な異常性（anomalie inoffensive）のことでもおそらくないでしょう」（*ibid.*）、と述べたのち、ベルクソンは突き放すがごとく、こう言うのです――

> **Le comique est... le comique, tout simplement.** C'est un certain domaine *sui generis*, qui fait une impression *sui generis* sur nous quand nous y entrons.(M 632)

「滑稽なものとは…滑稽なもの、単にそれだけです」。――あらゆる換言が拒まれています。問題となっているのは、独自の（*sui generis*）事象、他の概念と共に類化することのできない事象なのだ、というわけです。

しかし、では、『笑い』でベルクソンは何をしたというのでしょうか。文字通りとるなら、「滑稽なもの」をそれ以上定義し、分析し、考察していくことは不可能になるのではないでしょうか。また実際上、「滑稽なもの」とは「こわばり」であり、「生けるものに貼りつけられた機械的なもの（*du mécanique plaqué sur du vivant*）」（R 29）だとベルクソンは言った、つまり彼なりにやはり換言的な定義を行ったのではないでしょうか。そして単なる諸事実の列挙蓄積を越えて、それらの間に繋がりをつけ、それらを順序づけ体系的に見ていくためには、議論のあれこれの段階で、そうした定義とそれに伴う事実群の構成、諸事実の類化と種別化といった作業は不可欠なのではないでしょうか。

しかしどうやら話はそう単純ではないようです。『笑い』は「定義（définition）」と言い、「本質（essence）」、「定式（formule）」や「法則（loi）」といった語を繰り返していました。けれども上の言い方からすると、確かにそれらの語は用いられながらも、ベルクソンは何か独特の種類の叙述を行っていたはずなのです。それはいかなる叙述なのか、それが問題です。

【事例を包摂できる円を描いてみせるのではない】

４）これは２３版以後の『笑い』に付録として付されているものですから、よく知られているでしょう。非常に重要なテキストですが、ここではベルクソンの不満、否定的論点を確認するにとどめます。

「滑稽なものを定義するために、あちらこちらで収集される滑稽な効果の中で見いだされる一般的で、外からそれと見える一つないし複数の特徴を持ち出すことはできる。アリストテレス以来、この種の定義は数多く提案

するのは、この一種社会進化論的な観点ではありません。ここで前提とされている、「笑い」と一定の社会集団との関係、「笑い」の社会的機能という論点だけが、彼の注意を特に引き止めているのです。「生成によって」笑いの問題を扱うというベルクソンの、社会進化論的な観点への冷淡さに注意しておきましょう。

されてきた。そしてあなたの定義もこの方法によって得られたもののように私には思われる。つまりあなたは一つの円（cercle）を描き、行き当たりばったりに拾われたあれこれの滑稽な効果（effets comiques）がそこに含まれる（inclus）ことを示すのだ」（R 155）。ベルクソンの不満は先と同じです。そうして提起された定義は、「一般に広すぎる（généralement trop large）」（*ibid.*）のだ、というのです。それは、「必要条件」を示すかもしれないが、決して「十分条件」を与えるものではなく、その隙間に、定義には適合しながら、滑稽ではない事例がいくらでもすべりこんできます。ベルクソンはそれに対して言います、「私が試みたのは、何かまったく別のことだ（J'ai tenté quelque chose de tout différent）」（R 156）と。

まずいのは、対象に対して、「円」が緩い、広すぎることでしょうか。そうも見えます。しかしそうなら、多様な「円」を重ね、限定をきつくしていけば、事態は次第に改善していき、最後には「滑稽なもの」にぴったりと合う定義が得られると期待してもよいように思われます（生物→脊椎動物→哺乳類→猿人類→…）。しかしベルクソンはむしろ自分が「何かまったく別のこと」をした、と言うのです。

◆何が扱われているのか

ひとまず『笑い』に戻って、ベルクソンの言葉を聞き直しましょう。第一章冒頭で、ベルクソンは早々とこう述べています。

> 「我々がこの問題にとりかかるに当たって弁明しておきたいのは、我々は喜劇的空想力を一つの定義のうちに閉じ込める（enfermer）ことを目指してはいない、ということだ。我々はその空想力のうちに、何よりもまず、生きた何ものか（quelque chose de vivant）を見る。我々は、この空想力がたとえいかに軽いものだとしても、生命に対して払うべき尊重をもってこれを扱う。我々はそれが成長し開花するのを眺める（regarder）に留めるのだ。ある形態から別の形態へと、それと気づかれぬ移行（gradation）を通じて、この空想力は我々の目の前で実に独特な転形（de bien singulières métamorphoses）を遂げていくことだろう」（R 1-2）

『笑い』の中には、この « fantaisie comique » という語――仮に「喜劇的空想力」と訳しておきますが[6]――が幾度も登場しますが、ひとまずこれはさまざまの滑稽なものを滑稽なものとして示し、我々に笑いを喚起する、その意味では一種の規定的判断力であり、また滑稽なものを生み出し喜劇などを制作する際に働かさねばならない産出的構想力でもある、と見てよいでしょう。

同じ第一章の第五節（V）冒頭では、「すべての滑稽な効果（effets）を一つの単純な定式から引き出そうなどというのは、とんでもない話だ」（R 28）と再び言われます。そして同節の末尾では、「喜劇的空想力」が次のように、今度もまた生命的な語彙に結びつけられながら、こう叙述されています。

> 「この連続的進展は何に由来するのだろうか？つまりは、以上のように滑稽なものをイメージからイメージへと滑り行かせ、しだいに起源（origine）から遠ざかりながら、最後には無限に遠いアナロジー（analogies）にまで導いていくこの圧力（pression）、奇妙な推力（étrange poussée）とは何なのだろうか？それにしても、木（arbre）の枝を小枝へと、根を側根へと分割しさらに細分化していく力とは何だろうか。結局このように、一つの撓めがたい法則があって、それによって生けるエネルギー（énergie vivante）はどれも、少しでも時間が与えられるならば、可能な限りの空間を覆っていくように定められているのである。ところでまさに、喜劇的空想力とは一つの生けるエネルギーなのであり、社会という土壌の石だらけのところにたくましく育つこの独特な植物（plante singulière）は、やがて栽培されれば、芸術のこの上なく洗練された作物とも肩をならべようものなのである」（R 49-50）

[6] 空想力、という語はうまくありません。想像力 imagination と区別するためだけのことで、区別の必要がなければ同じく想像力と訳して構わないでしょう。ベルクソンも区別しているようには見えません。

このV節は「滑稽なものの拡張力（Force d'expantion du comique）」と名付けられていますが、しかし、即自的な「滑稽なもの」があって、それが勝手にどんどん拡張蔓延していくわけではありません。簡単に定義できないものがあるとして、それは究極的には、「笑い」でも「滑稽なもの」でもなく、それらを規定し駆動しているところの「喜劇的空想力」なのだ、と見るべきでしょう。枝や根を張り巡らせ、成長開花していくのは、「喜劇的空想力」、想像力なのであり、それがさまざまの事象の上に滑稽さを見いださせ、またさまざまに滑稽な事象を、喜劇といった洗練された形態に至るまで、生み出していくのです。その想像力――判断力でもあり、創造力でもある imagination - Einbildungskraft ――の作動するさま、その奔放な独特の成長様態、「実に独特な転形」を眺める（regarder）というのが、『笑い』、特にその第一章と第二章の主題だと言って構わないでしょう。

こうした箇所で喚起される生命的イメージ、成長し開花し、「転形」を果たしつつ、枝や根を分岐させながら伸び拡がっていこうとするエネルギーというイメージからして、『笑い』には、のちに『創造的進化』で展開される進化論的な生命哲学の少なくとも萌芽がある、といった指摘を行うことは可能でしょう。しかしそれはごく簡単な作業ですからここでは措くことにして、『笑い』の議論をもう少し細かく見てみましょう。

多種多様に成長し開花していく「喜劇的空想力」が、『笑い』の第一の叙述対象だとして、しかし、単にその諸相を、サリーによるあの列挙のごとく、順序なしに並べつつ「眺める」ことが問題なのではありません。ベルクソンはこの自由奔放とも見える「喜劇的空想力」の展開にもそれなりに一定のパターン、「想像力の論理」があるのだと述べています。だからこそ彼は『笑い』の論述のあちこちで「法則（loi）」や「定式」、あるいは「定義」を記すことができているわけです[7]。

> Il y a donc **une logique de l'imagination** qui n'est pas **la logique de la raison** [...] Pour la reconstituer, un effort d'un genre tout particulier est nécessaire, par lequel on soulèvera la croûte extérieure de jugements bien tassés et d'idées solidement assises, pour regarder couler tout au fond de soi-même, ainsi qu'une nappe d'eau souterraine, une certaine continuité fluide d'images qui entrent les unes dans les autres. Cette interpénétration des images **ne se fait pas au hasard. Elle obéit à des lois, ou plutôt à des habitudes, qui sont à l'imagination ce que la logique est à la pensée** (R 32).

しかしここで言われる「法則」や「定式」とは何でしょうか。私たちは、先に述べた疑問にまた立ち戻ることになります。上の引用を少し見直してみます。ベルクソンはここで、「理性の論理」を対比項として持ちだしています。それが「想像力の論理」を覆い隠しているので、この「理性の論理」の実質をなすのは「きっちり織り合わされた諸判断」であり、「堅固に据え置かれた諸観念」です。対して、「想像力（imagination）の論理」を構成するのは、当然ですが、「イメージ（image）」であり、イメージの「流動的な連続性（continuité fluide）」ないし「相互浸透（interpénétration）」です。ドーリアックへの反論でもベルクソンはこう述べていました、「この書物は、私の考えるところでは最初から最後までただひたすら、さまざまのイマージュの連合（association des images）についての、それらの『相互感染（contamination réciproque）』についての、滑稽な外見が次々と広がっていく運動（mouvement）についての研究なのです」（M 437）。「想像力の論理」こそが、例えば生理学的な意味ではこわばりの存在しない顔つきの中にも一種のこわばりを透かし見させ（R 20-21）、あるいは赤鼻において赤く塗りたくられた仮装を想定させ（R 31）、笑いを喚起するわけです。そうした想像力があり、そしてそれは「はっきり定まった自分の哲学」（R 21）を、すなわち我々の理性（raison）（*ibid.*）とは基本的に異なる作動様式を持っています。

ですから、ベルクソンにとっての問題は、通常の理性的な判断や、諸観念間の包摂関係、論理的関係に必ずしも支配されていない、それとは別種の独特な、それでも一応「論理」と呼ばれてよい、そうしたイメージの連合

[7] ベルクソンがやはり「法則」（そしてその適用）を、そして「定式」を、求めまた提示している箇所の列挙はここでは省きます。目立つ箇所を挙げるだけで、すでにかさばるこの資料プリントがまた一枚増えてしまうからです。

と連鎖の関係をそれとして描くことであったのだ――とりあえずそう言うことができるでしょう。

◆それで、いったい、何をしているのか

だとすれば、ベルクソンの記述において「法則」や「定式」、「定義」といった語、あるいは「演繹（déduire）」や「派生（dériver）」（R 28）などの語が現れるとしても、それらは決して「理性の論理」におけるようなもの、すなわち特殊事例を自らの下にすべて包摂する一般的な観念や関係、ただ論理的に進む判断の展開過程を意味してはいない、ということになるでしょう。そしてこれもまた、ベルクソンが種々の反論において確認を求める点でした。ドーリアックに対してはこう言われます――「明晰に考えを表すために（pour m'exprimer clairement）、私は正確な定式（formules précises）を与え、一定数の類型（types）を定義しなければならなかった。しかし私は読者に告げておいた、それで私がしようとするのは単に、滑稽な効果を前にして体験する事柄を了解しようと望む人々に参照点（points de repère 目印）を提起することなのだ、と」（M 436）。『笑い』付録でもこう言われています――「私は、ことを簡単にするために（pour simplifier）、テーマ（thème 主題）を記しはした、しかしそれより重要なのはあれこれの変奏（variations 変異）なのだ」（R 156）。その周囲を見回すための目印に過ぎない定式や類型、変奏に凌駕されるテーマ。通常の論理学では使い物にならないこの種の概念に、先に見たような「定義」、定義すべき対象を自らのうちに閉じ込める（enfermer, inclure）ことのできないような（通常の意味では破綻している）「定義」の概念を加えることもできるでしょう。ある与えられた定義が緩すぎるとして、だからといってそれに内包的な規定を重ねて外延を絞り込む、という作業へとベルクソンが進んでいかないのには理由があるのです。そもそも彼は、そうした作業が意味を持つのとは別の平面で論述を試みているのです。

ここまでの考察からこう言ってもいいでしょう。『笑い』が実地に試みつつ示そうとしているのは、類と種の関係、一般性と個別性の関係、そこから可能になる（古典的な）演繹導出の関係、それらが可能にしているような合理的な思惟**ではない**、別個の思惟の可能性でありその実在である、と。『幾何学的方法によって証明された笑い』などはあり得ないのです。だからといって、そのいわば反転鏡像として想定される、諸経験から一般化された『笑い』――手法としては逆に見えますが、しかしその目的となるヴィジョンは結局同じ（諸経験をそこから了解させてくれる一般的原理を手にすること、かくして整合的な体系を構成すること）です――が、ベルクソンの目指すものでもありません。その種の考察方法とは別のところで思考することが求められているのです。多くの哲学者の失敗を踏まえて、ベルクソンはこう述べていました――「彼らの失敗は我々にとって教訓となってくれるのであって、問題はまったく別の方法で、まったく別の目的で、まったく別の精神で（par tout autre méthode, avec un tout autre objet, dans un tout autre esprit）扱わねばならない」（M 632）、と。この「まったく別の」を了解せねばならないのです。なお注意すれば、目下問題なのは、『試論』以来おなじみの、〈言語は一般概念しか表現しないから、個人的な、あるいは個体的な独特のニュアンスを十全に示すことができない〉という論点の単純な反復ではありません。単純な円のごとき一般概念とそれによる定義を無効にしているのは、対象の複雑この上ない輪郭であるというよりも、むしろ« fantaisie »の独特の運動様態、「滑稽なもの」の独特の発生様式であるからです[8]。

ただそれでも、演繹も帰納もそれに適合せず、類種や一般性の支配を逃れるロジックとはいったいどのようなものであり得るのでしょうか。そもそもあるものごとが説明（ex-pliquer）されたとされるのは、ある個別例が、ある一般的ないし普遍的な法則や観念の一例として包摂了解（com-prendre, en-fermer, em-brasser, in-clure...）される時なのであって、こうした諸事象の連結――それは根本のところで空間的（ex（外に向けて露わにされ）/en, in, com

[8] この区別がいくぶん恣意的であることは認めます。魂の深い状態が、平板な一般概念では精確に叙述できないことと、その深い状態の「深さ」の背後にはそれが持続のうちに存在しているという事実が控えていることと、この二つの論点には確かに連関はあります。しかしこれを強調しすぎると、『笑い』の叙述が、持続する何かについての時間的な発生についての叙述だという、テキスト上は成り立ち得ない解釈に導かれてしまいます。引き続いての考察を待ちながらも、いったん区別する方向を選ぶゆえんです。

（内部に包摂される）な結びつきです――以外の場所で事象を理解するというのは、いったいどのようなことだと言うのでしょうか。ベルクソンのあの暴力的な断定が想起されてきます――「滑稽なものとは…滑稽なもの、単にそれだけです」。

しかしまた同時にここで想起されるのは、冒頭で引いたベルクソンの回顧です――「私はこのテーマを誤った仕方で扱ってしまったので、あらためてその定義を、発生を通じて（*per generationem* 発生的に）取り上げ直さねばならなかった」。笑いと滑稽さの根源にある「喜劇的空想力」が、生命的メタファーによって描かれていることを私たちは先に見ました。その発生と成長（generatio）を論じることが、『笑い』の考察すべてを貫いているのだとしたら、そしてそもそもそれによってこの『笑い』という書物が成立したのだとすれば、では、ベルクソンはそこでこの「発生」をどのような仕方で語っていたのでしょうか。

◆どのように行われるのか

「一般性／個別性」のフレームに囚われたままの帰納や演繹といった発想をいったん捨てて見直してみましょう。そうした私たちの目にとまってくるのは、『笑い』が用いる独特の語、明示的な概念とまでは言えないながらも、それだけに深いところからベルクソンの試みを特徴づけている一群の、おそらくは漠然と哲学素と呼んでよいタームです。「ライトモチーフ」、そして「主題／変奏」という語はすでに見ました。ここで重要なのは、そうした音楽的な用語で指示されているのが「一般的本質／個別的偶然例」や「包括的概念／包摂される事例」などとは異なる別種の関係なのだ、ということではないでしょうか。雑に言ってしまえば、そうした用語は、「イデアとそのコピー」といった図式から外れたある種の関係を指示するために動員されていないでしょうか。「ライトモチーフ」は、あれこれの説明に「伴い（accompagner）」はしますが、そのまま含まれるわけではありません。変奏は主題の変奏ですが、演奏される限り、いずれも同一平面で演じられるものです。超越的な同一者を自らの部分として分かち持つ諸々の実例、という図式は、ここではうまく機能しないのです。

また、発生と成長としての « generatio » が自然に導いてくる語として「糸（fil）」、そして「道（voie）」とその「方向（directon）」を挙げることもできるでしょう。系譜学（généa-logie）的語群と言っても構いません。先の「参照点＝目印」もここに含められるでしょう。これまでにも引用してきた、『笑い』第一章第五節の冒頭（R 28-29）をもう一度見直してみます。

> Avant d'aller plus loin, reposons-nous un moment et jetons un coup d'œil autour de nous. Nous le faisions pressentir au début de ce travail : il serait chimérique de vouloir tirer tous les effets comiques d'une seule formule simple. **La formule existe bien, en un certain sens ; mais elle ne se déroule pas régulièrement. Nous voulons dire que la déduction doit s'arrêter de loin en loin à quelques effets dominateurs, et que ces effets apparaissent chacun comme des modèles autour desquels se disposent, en cercle, de nouveaux effets qui leur ressemblent. Ces derniers ne se déduisent pas de la formule, mais ils sont comiques par leur parenté avec ceux qui s'en déduisent**.[...].Ou bien encore il faudra penser à une grande route forestière, avec des **croix** ou **carrefours** qui la jalonnent de loin en loin : à chaque carrefour on tournera autour de la croix, on poussera une reconnaissance dans les voies qui s'ouvrent, après quoi l'on reviendra, à la direction première. Nous sommes à un de ces carrefours. **Du mécanique plaqué sur du vivant, voilà une croix où il faut s'arrêter, image centrale d'où l'imagination rayonne dans des directions divergentes**. Quelles sont ces directions ? On en aperçoit trois principales. Nous allons les suivre l'une après l'autre, puis nous reprendrons notre chemin en ligne droite (R 28-29).

「定式（formule）」は存在するけれども、それは滑らかな演繹の出発点にはならないと言われます。私たちは考

察の折々にあれこれの「支配的な効果」に立ち止まり、それを「モデル」としつつ周囲に生じる類似（v. « ressembler »）の効果を目にすることになります。それらはもはや、最初の定式、そして「支配的な効果」に対しての漠とした「類縁性（parenté）」しか持っていません（注意すべきですが、この「類縁性」は、「演繹」――帰結における原因の部分的残存――よりももう一つ遠いところで確保されています（Ces derniers **ne se déduisent pa**s de la formule, mais ils sont comiques **par leur parenté avec ceux qui s'en déduisent**）。おそらくは単なる「分有」とは別のものが意味されているのです）。ここで特に定式として持ち出される「生命的なものに貼りつけられた機械的なもの」という概念、というよりむしろイメージは、それ自体で何かを意味するよりは、そしてさまざまの事例を自らのうちに含む何かであるよりは、想像力がさまざまな方向へと分岐していく道の暫定的な交差点、それらが発していく十字路として名指されています。想像力がそのように進んでいくからこそ、さまざまに滑稽なものはそこに、定義の中へのごとく「閉じ込められ」たりしないのです。

同種の考察を、これもまたすでに引いた文章から引き出すことができます。

> Nous voilà bien loin de la cause originelle du rire. Telle forme comique, inexplicable par elle-même, ne se comprend en effet que par sa **ressemblance** avec une autre, laquelle ne nous fait rire que par sa **parenté** avec une troisième, et ainsi de suite pendant très longtemps : de sorte que l'analyse psychologique, si éclairée et si pénétrante qu'on la suppose, s'égarera nécessairement si elle ne tient pas le **fil** le long duquel l'impression comique a **cheminé** d'une extrémité de la série à l'autre. D'où vient cette continuité de progrès ? Quelle est donc la pression, quelle est l'étrange poussée qui fait glisser ainsi le comique d'image en image, de plus en plus loin du point d'origine, jusqu'à ce qu'il se fractionne et se perde en **analogies** infiniment lointaines ?　(R 49)

ここでは「滑稽な印象」が次々と伝播していく「糸（fil）」という形象が語られています。この「糸」を構成するのは、「類似」「類縁性」、あるいは「アナロジー」と言われますが、そしてそこに「喜劇的空想力」の進展の連続性が委ねられているのですが、しかしここで問題なのは、それ自身同一な本質がだんだんと薄れながらも残されていくようなコピーの連続ではありません。もちろん私たちの想像力は、「こわばり」や「生命的なものに貼りつけられた機械的なもの」と名付けられようものを、理性の目にはそうとは見えない事例の中に見いだしつつ私たちを笑わせるのですが、これはそれら事例自体に内属する本質の認知によるものではありません。もしそうであれば、概念的な意味での「定義」が十全な意味で可能であったことでしょう。しかしベルクソンが繰り返し反論していたのは、自説に対するそうした理解様式に対してだったのです。「無限に遠い」アナロジーにおいてですら、同じ、あるいはさらなる強さで私たちを笑わせ得る何かが問題なのであって、太陽のように輝くイデーとその反映、さらにその反映、といった単純なグラデーション、本質主義的な構図は、ベルクソンのものではないのです。ここで「類似」「類縁性」と言われるものも、そうした構図とは別のところで考えられるべきものなのではないでしょうか。

おそらく、「発生的に *per generationem*」とベルクソンが語る考察の独自性は、こうした点に見いだされるべきでしょう。この「発生」は、単に発生源の本質をつかまえれば、そこからさまざまの事象の発生がすでにして取り押さえられたことになるような種類の事象ではなく――それはすべてがそこから演繹されてくる「定義」の偶像に立ち戻ることです――、それを捉えようとすれば、当の発生に付き従ってみるしかない、そうした別種の事象を意味していることでしょう。ベルクソンが「付き従う、辿る（suivre）」という語を多用していることは偶然ではないのです[9]。ベルクソンが、「道」や「方向」に付き従い、「糸」を辿る時、彼が行っているのは、例えば『エ

---

[9] suivre...
・...nous venons de **suivre** le progrès par lequel le comique s'installe de plus en plus profondément dans la personne (R 13).
・Nous allons les **suivre** l'une après l'autre, puis nous reprendrons notre chemin en ligne droite (R 29).
・**Suivons** donc cette logique de l'imagination dans le cas particulier qui nous occupe (R 32) / Des trois directions où nous devions nous engager, nous avons **suivi** maintenant la première jusqu'au bout (R 37).

チカ』が行っているような演繹（こう定義したのだから必然的にこういうことになる…）でもなく[10]、ソクラテスが対話者に強いる適切な定義への接近（そう定義するとこんな例外が生じてしまう、だからそうではなくて…）、でもないのです。問題なのは、「理性の論理」とは異なる論理だからです。

◇実際、どのように行われているのか（１）

この実例は『笑い』の至る所に記されていますが、例えば先に入り口と出口だけをみた第一章のＶでベルクソンが「生命的なものに貼りつけられた機械的なもの」という「中心的イメージ（image centrale）」（R 29, 43, 44）から出発して、三つの方向へと道を辿ってみせるその所作を見てみましょう。この最初のイメージからはまず、容易に「装い（vêtement）」のイメージ――衣服はひとがすぐれて笑いの対象とするものです（On devine alors combien il sera facile à un vêtement de devenir ridicule (R 29)）――、ひいては「偽装（déguisement）」「変装（travestissement）」、さらには「仮装（mascarade）」のイメージが一つ導かれてきます。そして実際にはそうでなくても（肌の色、赤鼻）仮装に見えるのなら、対象となるのが集団的儀式だろうが、自然だろうが、あるいは両者の組み合わせ（自然法則に成り代わり立ち勝ろうとする人為的規則、というイメージ）だろうが、滑稽さの効果を生みだし得ます。

第二の道行きは、「生けるもの／機械的なもの」の対比が「精神的なもの／身体的なもの」の対比へとスライドすることで歩まれていきます（繰り返しくしゃみする弁士）。そしてベルクソンはさらに道をこう辿ります。

> **Élargissons maintenant cette image : *le corps prenant le pas sur l'âme*. Nous allons obtenir quelque chose de plus général** : *la forme voulant primer le fond, la lettre cherchant chicane à l'esprit*. Ne serait-ce pas cette idée que la comédie cherche à nous suggérer quand elle ridiculise une profession ?(R 40)

「魂を追い越そうとする身体」というイメージを「拡大」してみよう、そうすれば「いっそう一般的な何かを得ることになる」。モリエールが好む、形式ばかりを優先させて本末転倒に陥る弁護士や検事、医者の滑稽さ、職業に密着した滑稽さがそこから論じられていきます。概念の外延が緩くされる、とはベルクソンは言いません。「このイメージ（image）を拡大してみよう」と言うのです。あくまで想像力（imagination）固有の働き方が問題になっているわけです。

第三の道。今度のベルクソンの言明はこうです：

> **Passons** alors de l'idée précise d'une mécanique à l'idée plus vague de chose en général. **Nous aurons une nouvelle série d'images risibles, qui s'obtiendront, pour ainsi dire, en estompant les contours des premières, et qui conduiront à cette nouvelle loi** : *Nous rions toutes les fois qu'une personne nous donne l'impression d'une chose* (R 44)

特に機械とも言わずとも、事物へと人間が化するように思われれば（宙に放り上げられるサンチョ・パンサ、舞台で殴り合い倒れる二人の道化芸人）それで滑稽な効果は十分に生じ得る――ベルクソンは観念（idée）を一般化しているように見えますが、そこで得られる可笑しいイメージは「いわばこれまでのイメージの輪郭をぼかすことで手に入る」ものなのであり、観念の一般化というのはそのための操作を意図的な水準で指示する仕方であ

・Ici encore nous avons voulu **suivre** fidèlement une direction naturelle du mouvement de l'imagination (R 43).
またとりわけ、第三章冒頭段落。

[10] ただしスピノザにおいて（『知性改善論』§96）、形相的定義などに比して、最近原因からのいわゆる「発生的定義」が特権視されていたことがここで想起されるかもしれません。定義の「十全性」に関してのこうしたスピノザ的見解とベルクソンの「発生的」考察との比較については、別個の検討が必要です。

り、滑稽さそのものの直近の原因ではないでしょう。ここでもイメージそのものの転形が問題なのであり、こうした道で「また新しい一連のイメージ」が得られ、それをベルクソンは辿っていくわけで、重要なのはむしろこうしたイメージの転形の仕方、その方向なのではないでしょうか。

例えば以上の確認から見えてくるのは、ベルクソンの議論が、概念の論理的連鎖や包摂／特殊化の関係によってではなく、まさしくイメージの固有の変形、転移、転形を、イメージの水準を離れることなく、次々と辿ることによって進められているという事実でしょう。

◇実際、どのように行われているのか（２）

実例としてはもう一つ、第三章の冒頭を見ても構いません。そこでベルクソンはそれまでの作業全体について、

> **Nous avons suivi le comique à travers plusieurs de ses tours et détours**, cherchant comment il s'infiltre dans une forme, une attitude, un geste, une situation, une action, un mot (R 101).

と振り返っています。この「辿り」は、これまでの哲学者のやり方と本質的に異なるもので、つまり「いくつかの目立つ、したがって粗雑な事例」を取り上げてそれで可笑しいものを定義する、そしてその「大きすぎる」網の目から多くの事実を取りこぼす（faire glisser）はめになる、のとは違うのです。

> 「我々は実際のところ、反対の方法を辿ってきたのだ。我々が光を投げかけてきたのは、上から下へ、であった（c'est du haut vers le bas que nous avons dirigé la lumière）」（R 101）

「上から下へ」と見ると、問題になっているのは論理的な「演繹」である、あるいはベルクソンは仮説演繹法を用いたのだ、と思われるかもしれません。しかしそうであるはずはありません。通常、演繹の方が個々の事物を取り逃しやすいのであって、もしベルクソンが、従来の方法が帰納であって自分の方法は演繹だ、と言おうとしているのであれば、ここでの彼の言明は意味の分からぬものになるでしょう。ベルクソンは主題を記しました。笑いに社会的な意味があるだろうこと、その意味でまず何より笑われる対象となるのは人間であり、それに属するとみられた性格――ある種の性格（煎じ詰めれば虚栄 « vanité »）――であろうこと（R 101-102, cf. R 99-100, R ch.1-II）[11]。しかし見られるように、これを「定義」だと理解してしまえば、それ自体が多くの事実を取りこぼすものでしかないでしょう。そうではなく、そこを出発点として、「滑稽なものを、そのさまざまの周回と迂回を通じて辿ってきた」、その辿りそのものが重要なのです（「テーマを記しはした、しかしそれより重要なのはあれこれの変奏なのだ」……）。そしてそれが、論理的な演繹ではない、独特のイメージ連鎖の生成への付き従いであったことは先に確認した通りです。

◆それで？

『笑い』という書物は、いったい何をしているのか。

ここまでの考察から言えるのは、次のことです：「喜劇的空想力」という生命的な対象を、類種概念や「一般／個別」の図式の外で、その生成を辿りながら叙述していくこと。もし『笑い』という書物に「結論」が欠けているように見えるとすればそれは、この生成を閉じ込められる（con-clure）ような場所などがそもそも存在しない

[11] そうした規定を手にするベルクソンの方法（事物にも人間にも関わり、状況や言葉にも見られる、実に諸々の滑稽なものが発してくる「源泉（source）」が、結局のところ、人間の性格の中にこそ見いだされる、という洞察へと彼が辿り着くその道行き）については、その内実に関する詳細な検討が必要でしょうが、ここではその余裕がありません。これは今回の報告の大きな欠落です。

からではないでしょうか？

しかしあらためて問わねばなりません。なぜそんなことをするのか。それで何が得られるのか。簡単に言うことは相変わらずできます。なぜか、と言えば、それは論究対象が、そうした叙述をしか許さないからです。生命的なものとは、類／種や一般／個別のシェーマとは別のところで――仮に言ってみれば、ただ唯名論的で個体的なリアリティの水準で、なおしかし何の秩序もなしにというわけでもなく――展開するものだからです。何が得られるのか、と言えば、「理論的な定義よりもしなやかな何か（quelque chose de plus souple qu'une définition théorique）」、「長い付き合いから生じるもののごとき、実践的で内的な認識（connaissance pratique et intime）」であり、それは特にそう望んだわけではなくとも結果的に一つの「有用な（utile）」認識にもなってくれるでしょう（R 2）。有用というのは、一つには滑稽なものを拵える手法（procédés）や規則（règles）を与えてくれるからですし（R 156-157）[12]、またここで特に対象となる「喜劇的空想力」は、それについての探求を通じて、人間の想像力というものの別の諸相についても多くを教えるものであろうからです（R 2）。

ただ、ベルクソン哲学全体の中に『笑い』という著作を置き直してみた時、私たちにはまた別の答え方が示唆されてきます。実のところ、『笑い』が実践したような「生成を通じて」の叙述スタイルは、『試論』や『物質と記憶』にはほとんど見られないものです。この意味で、『笑い』は以前の方法の応用篇であるよりもむしろ、ベルクソンのその後の諸著作の序論と見るべきでしょう[13]。もちろん序論は序論以上のものではなく、以後の著作がすでにそこに含まれているわけではありません[14]。しかしまさしく、私たちが『笑い』において見とどけたベルクソンの論究スタイルは、それ自身が「ライトモチーフ」として、以後の著作に伴うように現れているのではないでしょうか。この点をいくらか述べつつ、今回のすでに冗長となった報告をいったん切り上げたいと思います。

◇めくらましで終わる（１）

「喜劇的空想力」の描かれ方が、すでに『創造的進化』のエラン・ヴィタルというイメージの扱われ方を想起させることについては先に触れました。『進化』第二章は「生命進化の分岐的諸方向 Les directions divergentes de l'évolution de la vie.」と題され、その諸方向を「辿って」見せています[15]。類比は明らかでしょう。ただ、『創造的進化』で辿られるのは、我々人間の想像力（判断力、構想力）の展開ではなく、生命そのもの、分岐しつつ創造を果たしていく生成そのものです。論じられる対象の差異を軽視してはならないでしょう。それにしても、「生命

---

[12] 実際、『笑い』の中には、「……してみよ、そうすれば次の法則（手法、規則）を手にすることになるだろう」といったパターンの言明が数多く見られます。これは、先に見た、イメージの連鎖を「辿る」促しですが、しかし同時に、それがあくまで具体的であるがゆえに、その「辿り」がそのまま滑稽なイメージをこしらえる（fabriquer）いわばレシピ（formule は処方箋の意味をも担うでしょう。cf « formule pharmaceutique », R 82）になり得るわけです。「定義」や「法則」と共に、あるいはそれ以上に、『笑い』が「手法＝ことの進め方 procédés」という操作的な語を用いている周知の事実も、ここから理解されるはずです。

[13] 『笑い』の叙述に、それまでの著作の成果が反映されていないというわけではありません――第三部の芸術論に見られる、日常的知覚の一般性とそれを破る実在の還元不可能な個体的ニュアンスという論点、そしてまた特に、『物質と記憶』の理論（生への注意、良識）に密接に結びついた「夢」というものについての解釈（しかし「夢」についての講演は『笑い』に少し遅れています。実質的にほぼ同時期のものと言うのが適切でしょう）。私たちがここまでで描いてきた、『笑い』独特の叙述方法が、ベルクソン哲学における新しいフェーズを記している、と言いたいのです。

[14] 自分の著作の間に単純な演繹導出関係が存在しないことは、ベルクソンが何度も強調していたことでした（M 964, PM 97-98）

[15] 『創造的進化』における suivre :

・**En suivant les grandes lignes d'aussi près que possible** (EC 106).

・Mais, comme **les deux directions que nous avons à suivre** se trouvent marquées dans l'intelligence d'une part, dans l'instinct et l'intuition de l'autre, nous ne craignons pas de nous égarer (EC 186).

・Il ne suffit plus, en effet, de déterminer, par une analyse conduite avec prudence, les catégories de la pensée, il s'agit de les **engendrer.** En ce qui concerne l'espace, il faudrait, par un effort sui generis de l'esprit, **suivre la progression ou plutôt la régression de l'extra-spatial se dégradant en spatialité** (EC 208)

・car l'évolution s'est accomplie sur plusieurs lignes divergentes, et, si l'espèce humaine est à l'extrémité de l'une d'elles, **d'autres lignes ont été suivies** avec d'autres espèces au bout (EC 266).

の意味 signification」（第三章表題）を規定しようとするベルクソンが、それに先だって生命のさまざまの展開経路を「辿って」いることは、「滑稽なものの意味についての試論」としての『笑い』の叙述との親近性を示さずにはいないでしょう。そしてもし私たちの見積もりが正しければ、以上の考察は、『創造的進化』の読解に関しても一定の示唆を与えずにはいないことでしょう。

『創造的進化』第三章の終わりに至って、ベルクソンは「進化の意味 signification de l'évolution」という部分冒頭でさっそく述べていました――「我々が言うエラン・ヴィタルとは、結局のところ（en somme）、創造の要求（une exigence de création）のことである。それは絶対的な意味で創造できるわけではない、というのもそれは物質、つまり自らの方向とは反対の運動に正面からぶつかるのだから。しかしそれは必然性そのものであるこの物質から、自分自身を把握し直し、そこに可能な限りの非決定性と自由を導き入れようとするのだ」（EC 252）。これはしかし、『笑い』が言うところの、「単純な定式」というべきものではないでしょうか。質的に異なる諸方向に分岐しつつ、実にさまざまの形態から形態へと転形を遂げる生命のすべてが、以上のようなフレーズに「閉じ込め」られるものとは思われません。あらゆる「滑稽なもの」の中に、「オートマティスム」とか「生命的なものに貼りつけられた機械的なもの」がそのまま見いだされるわけではなかったのと同様に、実際の生命進化の全体には、先の「創造の要求」から何ら演繹されてこない諸相がいくらでも見いだされることでしょう。それでもなお、ある意味の探求を放棄せず、上のように「進化の意味」を語るベルクソンを支えているのは、いったいいかなるロジックなのでしょうか。

私自身がもどかしく思いながらも、この問いにすぐに答えることはできません。暫定的に言い得ることがあるとすればそれは、「創造の要求」とは、そして「エラン・ヴィタル」とは、『笑い』で言えばおそらくかの「中心的イメージ」、変奏によっていくらでも乗り越えられ得る暫定的なテーマとしてのみ、まずは捉えられるべきではないか、ということでしょう。その上で、ベルクソンがそれでもさまざまの「滑稽なもの」を前にして、単にそれらの羅列を行うのではなく、「発生を通じて」一定の系譜関係を設定し、「源泉（source）」を見定めようとした――それは『笑い』第三章で「性格の滑稽さ」という、「人格」単位に帰属される事象へと帰着させられたわけですが――のと同様に、さまざまの生命現象、それらの諸様態を前にして、それでもそこに一定の「意味」と「源泉」をベルクソンが立てるのはいかにしてなのか、という問いが残ります。それはもはや、一般化や類化による種類の「定義」からは了解できない、そんな独特の作業だったはずです。そもそもが、生命進化の分岐、あれこれの生物種の構成は、一般的概念の事例化、類種的ロジックにおける限定によってはなされないものでした。「滑稽なイメージ」の連鎖が、先在する一般概念の支配を受けないままに、それに閉じ込められることなく、イメージ自身の水準で奔放な転形を遂げていたように、進化もまた、エランという巨大な上げ潮のごとき流れがさまざまの「小川」へと、それぞれ「創造的」な仕方で、つまり「源泉」にすでに〈定義上〉包摂されてなどはいない姿で、具体的に展開していくものだったはずです。「原理＝始原（principe）」という語をベルクソンが拒むわけではありませんが、それ以上に「源泉」（『二源泉』！）というタームを用いる事実が何を意味しているのかについては、まだ考察の余地が相当に残っていることでしょう。そしてそれは、「体系（système）」という姿をとろうとする哲学へのベルクソンの変わらぬ嫌悪の根底にある、彼の基本的な実在観――それは否定的な水準ではすでに明らかにされています：論理的な構築を可能にするような「一般／特殊」「類／種」のロジックの外にある、ということです――を支える、こういってよければベルクソン哲学の実に基本的な直観を指し示すものでもあることでしょう。

◇めくらましで終わる（２）

もう一つ、『笑い』での叙述形式を、あの「形而上学序説」の議論と連接させておく必要があるでしょう。先に見たように、ベルクソンは「笑い」を呼ぶ「滑稽なもの」を一定の定義へと単純に閉じ込めようとする試みの不毛性、無益さを強調していました。多くの哲学者は、あれこれの滑稽なものの事例を前にして、一定の「円」を

そこに投げかけて見せます。しかしそれは「一般的に広すぎる」ことを余儀なくされるのでした。こうした描写は、「形而上学序説」の、例えば次のようなフレーズと呼応していることでしょう。そこでは、「概念」がこの大きすぎる「円」として批判されています。

> Les divers concepts que nous formons des propriétés d'une chose dessinent donc autour d'elle **autant de cercles beaucoup plus larges**, dont aucun ne s'applique sur elle exactement (PM(IM) 187).
> Ainsi surgiront une multitude de systèmes différents, autant qu'il y a de points de vue extérieurs sur la réalité qu'on examine ou **de cercles plus larges** dans lesquels l'enfermer (PM 188).

しかしよく知られるように、同じ論文の中でベルクソンは別種の概念、「流動的概念（concept fluide）」についても語っていました。

> 「……確かに諸概念は形而上学に不可欠なものである。というのも他の諸科学はみな、まず通常は諸概念について作業を行っているからであり、そして形而上学は諸科学なしには不可能だからだ。しかし形而上学が本来の意味で形而上学であるのはただ、それが概念を超える時、あるいは少なくともこわばった（raides）既成の諸概念を乗り越えて、我々が普通操作しているところの概念とはまったく異なる諸概念、すなわちしなやかで、動的で、ほとんど流動的で、直観の捉えがたい姿にそって象られる用意がつねにできている、そんな表象（des concepts bien différents de ceux que nous manions d'habitude, je veux dire des représentations souples, mobiles, presque fluides, toujours prêtes à se mouler sur les formes fuyantes de l'intuition）を創造する時だけだ」(PM 188-189).

> 「……しかし我々の精神はそうすることで、実在をそのあらゆる屈曲において辿り（suivre）、事物の内的生命の運動そのものを引き受ける（adopter le mouvement même de la vie intérieure）ことのできる、流動的概念（concepts fluides）へと至るはずである」(PM 214)

概念なき通俗的神秘主義の暗闇からベルクソン哲学を救おうとする読者の多くは、ここで語られている「流動的概念」に当然にも着目してきたのですが、しかし実際のところ、それがどのようなものであるのか、あまり明晰に語られることはなかったように思います。もちろん、語としては「エラン・ヴィタル」などがおそらくはこの「流動的概念」を指示してはいるはずですが、正確に言ってそれがいかなる点で他の概念と区別されうるのか、それが不明瞭であるわけです。

ここでもし『笑い』が私たちに示唆を与えるとしたら、それは次のようなものになるでしょう。――「流動的概念」は、実在の屈曲を「辿り」運動を「引き受ける」限り、一定の語とその辞書的意味ないし定義のようなものに閉じ込められるものではない。一連の転形や分岐、発生をさまざまに辿り通すタイプの叙述全体がそのまま、「流動的概念」がそれとして機能し表現されている場なのであって、そこから切り離されてしまえば、通常の意味での概念、一般的な定式、あるいは単なる曖昧なイメージしか手にできないことになる（実際、「エラン・ヴィタル」はそのように理解されてしまったのですし、ベルクソンはまたそれに対して反論を余儀なくされるのです（DS 115-120, : significatin de l'« élan vital »））。

ですから、『創造的進化』や『二源泉』で、「生成によって」諸事象の多様性が次々と辿られている箇所（例えば『進化』第二章（「エラン」の展開）、『二源泉』第二章（「創話機能」の展開）、等）では、それらのページ一面に「流動的概念」がありありと描かれ示されているのだ、と見るべきでしょう。ただしかし、それによってベルクソンのテクストの読解に関してどのような具体的指示が得られるのか、それについてはまた別の機会にします。